JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	カンジザイが拓く　～ニュー・ウルシ・ルネッサンス事業～
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ２，30
Issue Date	2009-07
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/8221
Rights	
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

5 今後の展望

カンジザイは、これまでの７年間、研究・開発に注力してきました。これまでの製品開発が実を結び始め、品質面でも商品化の目処が立ってきました。今後は、商品の販売にも重点的に力を入れ、更なる新素材、新製品の開発にも取り組んでいきます。

組合員の山谷尚敏さんは、JAIST の石川伝統工芸イノベータ養成ユニットの受講生でもあり、新商品の企画作成や、販売戦略までを含めた知識の習得、県内の様々な産地の事業者との交流も活発に行っています。JAIST では、産地や地域の活性化を推進する社会的なイノベータとしての山谷さんの活躍を応援していきます。

■ カンジザイ有限責任事業組合（カンジザイ LLP）概要

名　　称	カンジザイ有限責任事業組合
主な活動内容	紙器、漆を中心とした新素材開発、新商品開発、販売
組合員構成	主席代表：竹山　雅万（株式会社竹山紙器） 事務局長：志奈　幹雄（株式会社シナ・プロ） 企画開発：上村　重栄（上村紙器株式会社） 企画開発：山谷　尚敏（山谷漆器工房） 企画開発：寺田　隆（P.A.C 共同行政書士事務所） 企画開発：中川　善光（中川細巾織物）

※ LLP（有限責任事業組合）とは、創業を促し、企業同士のジョイント・ベンチャーや専門的な能力を持つ人材の共同事業を振興するために、通常の組合（民法組合）の特例として、①出資者全員の有限責任、②内部自治の徹底、③構成員課税（パススルー課税）の適用という特徴を併せ持つ制度。経済産業省により、2005 年４月 27 日に LLP 法が成立し、同年８月１日から施行された。

地域再生人材創出拠点の形成プログラムとは

石川伝統工芸イノベータ養成ユニット事業は文部科学省・科学技術振興調整費の地域再生人材創出拠点の形成プログラムにより運営されています。同プログラムは大学の個性・特色を活かし、地域産業の活性化や地域社会のニーズの解決に向け、地元で活躍し、地域の活性化に貢献し得る人材を育成することを目的として、平成 18 年度に創設されました。大学が地元の自治体と連携し、科学技術を活用して地域に貢献する人材を育成する「地域の知の拠点」を形成するシステムを構築することを支援する仕組みです。

JAIST 社会イノベーション・シリーズ 2

発　行　2009 年７月

発行所　国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・地域・イノベーション研究センター
〒923-1292　石川県能美市旭台 1-1　知識科学研究科棟Ⅱ７階

本誌は、文部科学省科学技術振興調整費地域再生人材創出拠点の形成プログラムの助成を得て発行しております。

■本誌に関するご意見、お問い合わせ
TEL：0761-51-1839　FAX：0761-51-1767　E-mail：dento-secr@jaist.ac.jp

JAIST
JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY 1990
北陸先端科学技術大学院大学

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES
社会イノベーション・シリーズ 2

カンジザイが拓く
～ニュー・ウルシ・ルネッサンス事業～

世界的な不況の中、伝統工芸産地は産業の継続が危ぶまれるほどの危機に直面しています。日本でも有数の伝統工芸産地を有する石川県でも状況は同じですが、従来の産地の枠を超えた取り組みが各所で始まっています。その中でもカンジザイ LLP は、紙器、漆器、デザイナー、行政書士といった多様な事業者から構成され、石川県内でも１、２を争う早さで LLP を設立し、組織的に異業種連携による商品開発を進めています。そんなカンジザイが失敗を繰り返しながらも新しい漆の可能性を広げる取り組みを紹介します。

No.30

1 きっかけは「紙」と「漆」

カンジザイ LLP は、輪島の漆器事業者と漆器のパッケージを製作している紙器事業者とが紙と漆を使った新しい製品を開発することができないだろうか、という話からスタートしました。その後、デザイナーや山中漆器の塗り師も加わり、2002 年から有志グループとして活動を開始しました。

カンジザイの名前の由来は、無から有を創造し、生活に豊かさをもたらすという「観自在菩薩」から取られています。カンジザイグループの発足により、紙と漆とを組み合わせた新製品の開発に着手していきます。

2 数々の失敗から生まれた新製品

❶ 紙に漆を施した器の開発

数々の試行錯誤の結果、最初の商品である紙に漆を施した器やトレーが出来上がりました。紙に漆を塗った新製品は、平成18年度の石川ブランド優秀新製品に認定されています。しかし、この製品は、購入した顧客から「つけ置き洗いをしたら水が下地の紙に染みこんでしまった」などのクレームが寄せられます。また、この製品は、伝統的な輪島塗の製法にこだわったことがかえって紙の質感を生かしきれていない、という商品コンセプトである「紙と漆のコラボレーション」を反映しきれていないという課題も挙がります。

❷ 固めない漆の折り紙

この開発の経験は、グループのメンバー間の議論を促し、新製品開発のコンセプトが明確になってきたことにより、新製品のアイデアへとつながっていきます。そのコンセプトは、①従来、漆器業界では常識となっていた漆を固めて利用する漆器や乾漆ではなく、「固めない漆」を開発、利用する、②「紙の質感の良さを活かす」という 2 点に集約されます。

このコンセプトの下、開発メンバーは、色漆と柔軟液を利用することで紙を柔らかく折り曲げやすく、漆の割れを防止する製法を採用した“カンジザイ漆”を開発することができました。この“カンジザイ漆”の開発が、紙に拭き漆の技法を利用した折り紙「ふき漆」の開発につながります。拭き漆とは、生漆を何度も素地に摺りこむ漆器製造の伝統的な技術で、黒漆のように土台となる素地が見えなくなるようなことはなく、紙の素材感や質感が残る仕上がりとなります。この「ふき漆」は、見本市や展示会への出品を通して、その後の開発に大きく影響を与える塗料メーカーと出会うきっかけとなりました。

❸ お坊さんのランチョンマット「鉢単（はったん）」

「ふき漆」の開発は、お坊さんが食事の際に使用し、托鉢の際には折り畳んで持ち運びする「鉢単（はったん）」と呼ばれる和紙に漆を施した紙の開発依頼へとつながります。鉢単は、一日に何度も折り畳んでは広げてを繰り返すため、折り目の耐久性が問題となります。開発メンバーは、早速これまでの経験を活かして和紙にカンジザイ漆を施しましたが、何度も折り畳むうちにやはり畳んだ箇所が磨耗して割れてしまいます。カンジザイはここでも試行錯誤を繰り返し、少しずつ改良を重ねることで折り畳んでも割れない「鉢単」の開発に遂に成功します。

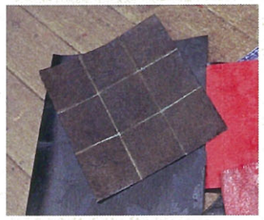
❹ 布の質感を残す「布漆」の開発

同時期、開発メンバーはこれまでの紙とは別にデニムや不織布といった布に漆を施した「漆布」も開発していきます。布の場合は、衣服やケースなど、日常身に着けたり、持ち運びしたりすることも考慮する必要があるため、やはり耐久性が重要となってきます。また、衣服にする時には、皮膚が漆にかぶれないか、ということも重要です。ここでも、開発メンバーは自分の衣服やスニーカーなどに実際に漆を施し、試着して一つずつ課題が解決されているかを確認していきました。製品のコンセプトの「布の質感を残す」、「固めない漆」を活かしながら、耐久性やかぶれないかどうかの機能面、安全面の問題も試作を重ねていきます。漆布は、その努力の甲斐もあり、製品開発の成功に結実していきます。

❺ 漆のカードケース「Sen-jyu」の開発

現在は、これまでの試行錯誤から得た経験や、塗料メーカーとの協力、そして現在メンバーとなっている織物事業者との出会いが重なりあい、ジャガード織にカンジザイ漆を施したカードケース「Sen-jyu」が開発されています。

現在のジャガード織カードケースは、新しいコンセプトを実現するための不断の努力と失敗の積み重ねにより、漆の新しい可能性を広げた結果生まれたものなのです。



折り畳みを繰り返すと折り目が割れてしまう「鉢単」

カンジザイ漆によるカードケース「Sen-jyu」

3 そして LLP が誕生！

カンジザイは、これまでの新製品開発の過程で、九谷焼や加賀友禅などの様々な事業者が入っては抜け、メンバーが変わり続けてきました。また、カンジザイや新製品の数々は、新聞や見本市、展示会への出展を通じて認知度が上がってきましたが、この結果、事務の面で非効率な点が出てきました。そこで、カンジザイは、現在同 LLP の組合員にも名を連ねる行政書士に相談したところ、設立の容易さや組織設立に係る初期投資が少なさというメリットを考慮して LLP を設立することになります。カンジザイ LLP の誕生の瞬間でした。

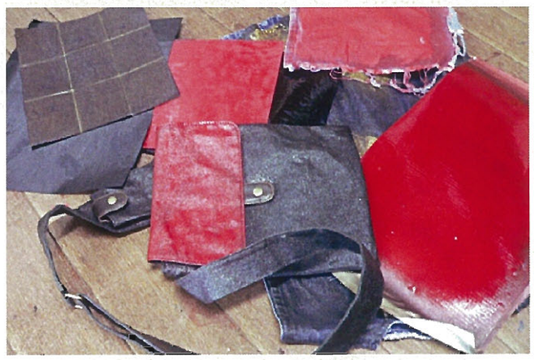
これまでは、顧客との応対は各メンバーが個別に行っていたため、メンバー全体への連絡の不備や重複など、事務面で非効率な点がありましたが、事業体としたことで、事務局機能を一本化し、また、組合員各自の役割分担を明確にすることによって研究、開発体制が整ってきました。

4 異業種連携の意義

伝統工芸産地は、バブル期をピークとして、年々厳しい状況に陥っています。そのような背景の中で、各産地は、産地振興のために有名なデザイナーとコラボレーションするなど、これまでにも異業種連携を進めてきましたが、1 度きりで終わってしまうもの、売れなかったものがたくさんあります。カンジザイでも、これまで輪島塗や九谷焼、加賀友禅の事業者が参加しては抜けていくことが多かったといいます。また、メンバーは、お互いの業界を知らないため、自分の常識が通じず、開発におけるコミュニケーションがうまくいかずに離れてしまうこともありました。

カンジザイの組合員は、異業種が集まるメリットについて「他業種のモノの考え方や製造方法の違いは、これまでの自分の仕事とは異なった視点からの意見となって出てくるため、それが新製品のアイデアや開発のヒントになることが多い」といいます。ヒントがそのまま新製品開発の成功に結びつくことは少ないですが、幾多のヒントの蓄積や実際に試行錯誤して得た経験の蓄積が次の製品開発に活かされるという良い循環を作っています。

カンジザイでは LLP を設立することにより、「新しいことに取り組んでいく」というビジョンを共有できる基盤を作り、また、失敗を恐れず何度も挑戦する情熱を持って、相手を理解しながら（共感しながら）開発を進める環境を整えたのです。



これまでの失敗の数々